

欺瞞の出現間隔における曖昧な欺瞞の繰り返しによる影響

黒川 優美子 (神戸学院大学 大学院人間文化科学研究科, xxx.k.y.1021@gmail.com)

秋山 学 (神戸学院大学 心理学部, akiyama@psy.kobegakuin.ac.jp)

Acceleration of deception through repetition of ambiguous deception

Yumiko Kurokawa (Graduate School of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University, Japan)

Manabu Akiyama (Department of Psychology, Kobe Gakuin University, Japan)

Abstract

Repeated deception gradually leads to large transgressions. Oftentimes, people behave deceptively without their awareness. However, the mechanism in which the repetition of ambiguous deception without obvious intention of deceptive behavior influences intentional deception remains unclear. The study set up a scenario where a participant can opt for ambiguous deception and investigated the intervals between such instances in interpersonal situations. Moreover, a sender-receiver game was conducted in which participants were allowed to voluntarily and repeatedly deceive another participant. Results revealed that 26 of the participants cheated during the experiment and that their intentional deceptive decisions gradually increased in the latter half of the game. Furthermore, the intervals between ambiguous deceptive acts shortened over the course of the game. These findings indicate the necessity to investigate the mechanisms involved in the dynamic changes that occur during the practice of deception.

Key words

self-serving dishonesty, interpersonal situation, ambiguous deception, sender-receiver game, intention

1. 問題

1.1 欺瞞とは

欺瞞 (deception) は、身近なありふれた現象である。欺瞞を行う際には、欺瞞の標的となる他者が存在し、なおかつ事実とは異なる情報を伝えるという虚偽性を伴うことが一般的である。また、欺瞞には利己的欺瞞と利他的欺瞞が存在する。利他的欺瞞は、美味しくないと料理を美味しいと言うなど相手を傷つけないことを目的とした欺瞞である。一方で、利己的欺瞞は、たとえ相手を傷つけても自らの利益のために行う欺瞞を指す。このように、両者は異なる性質を持った欺瞞であるため、どちらの欺瞞を取り扱うのかを明確にしておく必要がある。一般的には、利他的欺瞞よりも利己的欺瞞の方が日常的であると考えられており (菊地・佐藤・阿部・仁平, 2008)、利己的欺瞞では他者との信頼関係を揺るがしかねないといった他者との関係に与える影響も考えられる。このため、本研究では、欺瞞を他者に対して事実ではないことを述べることに定義し、利己的欺瞞に焦点を当てる。

一般的な欺瞞の定義では、欺瞞を虚偽性と意図性の双方を伴う行為と定義する事が多い (ヴレイ, 2016)。特に、これまでの欺瞞研究においては、明確な意図を伴う欺瞞に焦点が当てられている。明確な意図を伴う欺瞞とは、例えば、欺瞞の行為者が実際とは異なると明確に理解しているにも関わらず、意図的に自己利益のために他者に欺瞞を行う場合などである。

1.2 欺瞞の意図性

一方で、人々は時として、自身の行動が非倫理的であると認識せずに非倫理的行動を行うことがある (Sezer, Gino, & Bazerman, 2015)。これは、自身の行為を非倫理的であると認識させない倫理的盲点 (ethical blind spot) によって生じる。つまり、明確に欺瞞を行うという意図を持たず、意図が曖昧なまま欺瞞を行うこともあるということである。この倫理的盲点は、誘惑的で曖昧な状況で出現し、曖昧さが非倫理的行動を行うための正当化として機能する (Pittarello, Fratrescu, & Mathot, 2019)。例えば、小銭などのお釣りを多くもらったような気がするといった、自己に有利ではあるが自己利益が確実に増えることが明確では無い曖昧な状況を考えてみる。こうした状況では、お釣りが誤って多くもらったことが明確ではなく曖昧であるため、明らかに人を欺こうとする意図を伴わずにお釣りを多くもらうことが可能である。つまり、意図が曖昧な欺瞞とは、当該の行為が欺瞞であることを確信が持てず曖昧な状況において、その行為が欺瞞となるかどうかを明確にせず曖昧なまま、その行為を行うことである。さらに、この意図が曖昧な欺瞞は、自身の欺瞞に気づきにくいだけでなく、他者の欺瞞も認識させにくくする (Gino, 2015)。このように、意図が曖昧な欺瞞は社会的問題の契機となりうる。しかしながら、欺瞞を研究する際には明確な意図を伴う欺瞞に焦点が当てられており、曖昧な意図を伴う欺瞞の果たす役割について十分な検討がなされていない。そこで本研究では、意図の明確な欺瞞だけではなく、意図の曖昧な欺瞞も視野に入れて検討を行うことにする。

1.3 欺瞞研究における送り手・受け手課題

欺瞞を行う際、欺瞞の行為者自身の意図性だけでなく、

欺瞞の行為者を取り巻く第三者から見て、欺瞞と推測されるか否かによっても、欺瞞を行うかどうかといった意思決定が左右される。そこで本研究では、欺瞞の行為者の意図性だけではなく、第三者からみたときの欺瞞にも着目する。このような行為者だけではなく、その受け手がどのように行為者からのメッセージを捉えるかについても考慮したものが送り手・受け手課題 (sender-receiver game; Gerlach, Teodorescu, & Hertwig, 2019) である。この課題では、送り手からの情報に基づき所与の判断を求められる受け手と、受け手が下す判断の手がかりとなる情報を提供する送り手という2者から構成される課題である。送り手は、受け手に対して虚偽の情報を伝えることで送り手の自己利益が増加する。すなわち、送り手は欺瞞を行うかどうかを選択する立場を担う。受け手に対して送り手が欺瞞を行うという欺瞞の標的が明確に課題の中に位置づけられていることがこの課題の特徴である。このため、他者から欺瞞と推測される行動によって、他者から制裁を受けることが懸念され、欺瞞を行うことを躊躇する可能性も検討することが可能な課題である。

送り手・受け手課題を用いて、送り手が明確な意図を持って欺瞞を行える上に、欺瞞の受け手である他者から欺瞞であることが指摘されにくい曖昧な状況において欺瞞を検討したのが Garrett, Lazzaro, Ariely, & Sharot (2016) である。Garrett et al. (2016) は、このような状況下において欺瞞を繰り返し行うことにより、欺瞞を行い易くなることを示している。この実験で Garrett et al. (2016) は、欺瞞を繰り返し行わせるため、ペニー課題を用いて検討を行っている。ペニー課題とは、瓶の中の硬貨の総額を推定することを求められる推測者に対して、総額を推測する手がかりを推測者に提供する助言者という2者によって構成される課題である。推測者が受け手であり、助言者が送り手となる送り手・受け手課題の一種である。助言者は、瓶の中でペニー硬貨が覆い被さるように積み重なった状態を、瓶の外側から眺め、ペニー硬貨の総額を推定し、これを推測者に助言する。推測者は、助言者からの助言を参考にして、推測者自らが推定したペニー硬貨の総額を実験者に報告する。この際、助言者と推測者がペニー硬貨の総額を正しく回答すれば、双方に等しい報酬が与えられる。ところが、あらかじめ助言者のみに伝えられているペニー硬貨の総額範囲を超えた額を、助言者が推測者に助言すると、助言者にのみ報酬が与えられる。すなわち、助言者には、自己利益のために推測者に対して実際よりも多い額を助言するという利己的欺瞞が動機づけられている。

Garrett et al. (2016) は、この課題を用いて、自己利益増加のために他者を欺く条件、自己利益増加が他者利益にもなる条件、そして自己不利益ではあるが他者利益増加となる条件を設け、欺瞞の拡大とそれに伴う扁桃体などの神経活動を検討した。実験では、助言者にのみ教示されている瓶の中のペニー硬貨の金額範囲を超えて、助言者が過大に助言している金額が時間とともにどのように変化するかには焦点が当てられた。その結果、自己利益

増加のために他者を欺く条件において、他の条件よりも、ブロックの経過に伴い、徐々に助言する金額、それも欺瞞と見做される金額が増えることが明らかにされた。つまり、最初は小さな欺瞞だったものが、欺瞞を繰り返すことで、より規模の大きな欺瞞を行うようになるということである。以上のことから、欺瞞を繰り返すことは、いずれ重大な結果を伴う行為に発展する可能性が示された。

1.4 欺瞞意図における曖昧さ

ペニー課題では、瓶の中でペニー硬貨が覆い被さるように積み重なった状態を刺激として呈示しており、瓶の中のペニー硬貨の金額を正確に推定することが困難であり、推測者にとってペニー硬貨の総額は曖昧である。このため、推測者にとっては助言者が極端に過大な金額を助言しない限り、刺激の曖昧さから欺瞞が確実に行われているかどうか分からない。一方で、欺瞞を行う際、助言者はあらかじめ教示されているペニー硬貨の総額範囲を超えて過大にペニー硬貨を助言しなければならない。このため、助言者は欺瞞を行う際、欺瞞を行うという意図を強く認識しなければならない。以上のことから、ペニー課題では、推測者から見た場合に欺瞞が指摘されにくく、かつ、助言者にとっては明確な意図を持って欺瞞を行わなければならない課題だと言える。

しかし、日常場面において、Garrett et al. (2016) のような明確な意図を持って欺瞞を行うことばかりとは言えない。これまでの研究から、人々は自身が正直であることを選好し (Abeler, Nosenzo, & Raymond, 2019)、自己利益を最大にするほどの欺瞞を行うのではなく、正直な自己を維持可能な程度にしか欺瞞を行わないことが指摘されている (Hochman, Glöckner, Fiedler, & Ayal, 2016; Mazar, Amir, & Ariely, 2008; Welsh, Ordóñez, Snyder, & Christian, 2015)。以上のことから、人々は自身を正直と見なすため、Garrett et al. (2016) で示されたような明確な意図を伴う欺瞞だけではなく、欺瞞を行ったかどうかは行為者自身あるいは第三者から見て曖昧な欺瞞を行う可能性が提起できる。

本研究では、第三者の存在を意識するため、送り手・受け手課題を用いた上で、Garrett et al. (2016) のように明確な意図を伴う欺瞞だけではなく、行為者にとって欺瞞であるという意図の曖昧な欺瞞、あるいは第三者から見ても欺瞞であると明確に推測できない欺瞞が行えるようにする。これにより、第三者から欺瞞を行なったことが指摘されにくく、かつ行為者自身も明確な意図を持って欺瞞であるとは言えない反応をすることが可能となるため、正直な自己を維持可能となる。

行為者自身も明確な意図を持って欺瞞であるとは言えない反応を検討するため、平面のドット刺激を使用し、刺激の可知性を本研究では操作する。平面のドット刺激とは、図1(a)のような画面にいくつかのドットを散りばめたものである。これにより、刺激の可知性が高まり、刺激の変化が助言者と推測者にとって分かりやすく、か

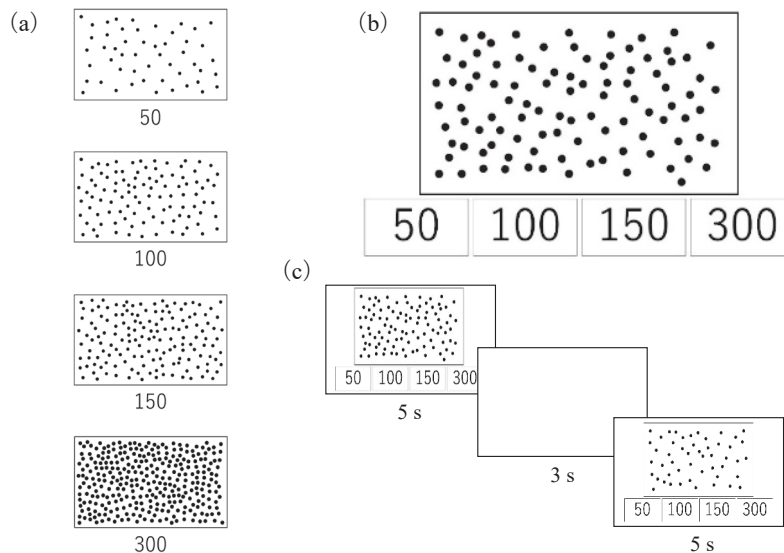


図1: ドットの見本と手続き

注: (a) 提示した4種類のドット刺激 (下の数字がドットの数)。 (b) 本番段階の例。 (c) 課題の手続き。

つ、実験者から見て、正確な事実を伝えているかどうか判断しやすくなる。しかし、推測者にとって刺激の可知性が高すぎると、助言者が明確な欺瞞を行いにくなる可能性がある。そこで、Garrett et al. (2016) と同様に推測者にとって、助言者よりも刺激の曖昧性が高くなるように、推測者には瞬間的にしか刺激を呈示しないと言う教示を助言者に伝える。以上のことから、本研究では、ドット刺激を使用することで助言者にとって刺激の曖昧性を低めつつ、推測者にとって欺瞞が明確と感じるものか、あるいは欺瞞であると明確には指摘しにくく曖昧さが残るものかを助言者側が操作可能であるペニー課題を応用した課題を用いて検討を行う。

Garrett et al. (2016) においては、ペニー硬貨総額の範囲が助言者にのみあらかじめ教示されており、助言者はこのペニー硬貨総額の範囲を超えて、意図的にしか欺瞞を行うことができない。そこで本研究では、刺激の曖昧性を残しつつも、明確な意図を伴う欺瞞であることが容易に推測される反応と、意図的な欺瞞なのか誤反応なのかを弁別しにくい反応を助言者が選択できるようにするため、推測者への助言に関する回答を求める際に、多肢選択法を用いる。これにより、Garrett et al. (2016) のように助言金額を自由に助言者に考えさせることなく、事実を助言するか、事実か欺瞞かを見分けがしにくい曖昧な助言を行うか、あるいは、推測者からも欺瞞と捉えられるような欺瞞を助言するかどうかを助言者が選択可能にする。具体的には、過大に助言する際、実際に呈示している刺激と助言内容との間にどれだけ大きな乖離があるかに基づき、欺瞞の意図が曖昧か明確かを区別する。これにより、推測者から曖昧あるいは明確な欺瞞と受け止められる判断のいずれを助言者が選択するのかを検討することが可能となる。

本研究で使用する課題は、推測者にとって欺瞞が曖昧

であるように、助言者にとっても欺瞞が曖昧となる可能性があるということが留意点として挙げられる。例えば、実際は50個のドット刺激を呈示されたにも関わらず、助言者が100個だと思い込み、実際よりも過大に100個を助言し正確な助言ができたと考えてしまう場合もありえる。つまり、誤反応である。しかし、このような誤りは、正確には欺瞞とは言えないものの、結果として助言者の利益となるため、利益のある誤りとして捉えることが可能である。Hochman et al. (2016) は、このような利益のある誤反応を欺瞞と見なしている。本研究においても、Hochman et al. (2016) に則り、誤反応であっても過大に助言することで助言者に利益となり得るため、欺瞞と見なし検討を行う。

1.5 本研究の目的

本研究では、これまで欺瞞研究で行われてきた送り手による明確な意図を伴う欺瞞だけではなく、欺瞞の送り手と受け手の双方にとって欺瞞かどうか曖昧な欺瞞の検討を行うことを目的とする。その際、ペニー課題を応用し、対人場面において欺瞞を繰り返して誘発する課題を実施する。そして、推測者にとって欺瞞であることが明確な行為あるいは曖昧な行為を助言者が選択することを可能にする。これにより、どのように繰り返しの欺瞞が変化するのか、具体的には、欺瞞を繰り返すことにより欺瞞の出現頻度や欺瞞が生起する試行間隔が短くなるかどうかを検討する。

2. 方法

2.1 実験参加者

男女大学生26名(男性15名、女性11名、平均年齢19.23歳、 $SD = 1.14$)が実験に参加した。参加募集は講義時間内に行った。いずれの参加者においても、実験の説

明を受けた上で同意書に署名してから、実験に参加した。なお、本実験は神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

2.2 欺瞞課題

本課題は、助言者として推測者役のもう1人の参加者に助言を行う課題であった。なお、推測者役のもう1人の参加者は実験者の協力者であった。実験参加者に推測者を本物の参加者だと信じ込ませるため、推測者への教示は助言者である実験参加者にも聞こえるように行った。推測者への教示後に、実験参加者に以下の教示を行った。これからいくつかのドットが含まれる長方形が画面上に5秒間呈示されること、そのドットの数を実験参加者が推測者に助言する課題であること、助言は刺激が呈示されている5秒間に行うこと、推測者は同じ刺激を0.5秒だけしか見ることができないため、実験参加者の助言が必要となること、ドットは50、100、150、300個の4種類のみであることを伝え、どのようなドット刺激が呈示されるのかを例示した。そして、実験参加者の助言を参考にして、推測者はドット数を推定し、最終的なドット数を実験者に報告すること、そして、それが正確であった場合に両者に5円ずつ報酬を与えること、もし実験参加者が実際の数よりも大きい数を推測者に助言し、その結果、推測者がその助言と同じドット数を実験者に報告した場合、助言者にのみ2倍の10円の報酬を与えることも伝えた。つまり、助言者が推測者に過大な助言を行うほど自身にだけ利益が得られることを説明した。なお、本研究では、呈示される刺激のドットが50、100、150個の場合には過大な見積りを助言できるため欺瞞が可能であるが、300個の場合にはそれ以上の選択肢がないため欺瞞が不可能であった。また、提示されたドットの刺激は全て異なっていた。

2.3 手続き

実験参加者は、推測者を演じるもう1人の参加者と対面後、それぞれ別室に案内された。本実験では、助言者として推測者役のもう1人の参加者に助言を行う課題であり、その課題で獲得した金額に応じた謝礼を支払うことを説明し同意を得た。なお、本研究では、生理指標として自律神経系の反応を測定するため、参加者に心電図の電極を装着した上で、課題に取り組むことを求めた。このように、生理指標の測定を行っているが、本稿では行動指標にのみ着目するため、心電図は分析に含めない。

課題の説明後、ドット数を弁別できるように、実験参加者にドットとその個数を呈示した(弁別段階; 図1(a))。弁別段階では、50、100、150、300個のドットを3回ずつ順番を変えて5秒間呈示した。その後、本番段階では、ドットとともに50、100、150、300個の4つの選択肢を呈示し(図1(b))、呈示されているドット数が50個なら1、100個なら2、150個なら3、300個なら4のボタンを押すように教示した。本番段階では、ドット刺激を5秒間呈示し、呈示終了から3秒後に次の刺激を呈示した(図1(c))。

本番段階は、20試行(4種類のドット×5試行)を1ブロックとし、6ブロックの120試行(4種類のドット×30試行)を行わせた。そして、ブロックが終わるごとに1分間の休憩をはさんだ。休憩時間には実験参加者に、当該ブロックまでに獲得している累積報酬金額を口頭で伝えた。120試行実施後、実験参加者に本研究のデブリーフィングを行い、一律の謝礼を支払ってから実験終了とした。

2.4 データ処理

呈示されるドット数と助言者役の実験参加者の助言との対応関係に基づいて、得られた反応を以下の4種類に分類した。すなわち、明確な欺瞞反応、曖昧な欺瞞反応、過少反応、そして正当反応である(表1)。明確な欺瞞反応(以下、明確反応)は、実際に呈示されたドット数よりも2倍以上の数のドットを助言した反応のことを指す。曖昧な欺瞞反応(以下、曖昧反応)は、ドット100個のときに150個と助言するといったように、明確反応までとはいかないまでも過大なドット数を助言した反応を指す。過少反応は、刺激に関わらず実際よりも過少に助言した場合を指す。そして、呈示されたドット数を正確に助言した場合を正当反応とした。このように参加者の反応を分類した上で、明確反応と曖昧反応のそれぞれの出現率、推移、反応が出現するまでの試行回数(以下、欺瞞反応出現間隔)について検討した。

表1：呈示刺激と助言ごとの反応分類

		助言			
		50	100	150	300
呈示	50	正当	明確	明確	明確
	100	過少	正当	曖昧	明確
	150	過少	過少	正当	明確
	300	過少	過少	過少	正当

2.5 欺瞞と誤反応

欺瞞試行における過大な助言が、ドット数の誤認によるものなのか、あるいは欺瞞によるものかを検討するため、10名の参加者を対象に予備実験を行った。予備実験では、ドット数を正確に見積もることでのみ参加者に報酬が支払われ、本実験の課題のようにドット数を過大に助言することに対する誘因は存在しなかった。予備実験の結果⁽¹⁾、正当反応は88.4%、欺瞞反応は9.5%、過少反応は2.0%であった(図2; 予備実験)。つまり、この課題では、90%近い正当反応率が見込まれるということである。一方で、欺瞞を誘因づけた本実験においては、正当反応は79.2%、欺瞞反応は19.8%、過少反応は1.0%であった(図2; 本実験)。欺瞞が動機づけられたか否かで、課題の正当反応率が異なるかを比較するため、予備実験と本実験の正当反応率において χ^2 検定を行った。その結果、有意な差がみられ($\chi^2(2) = 63.73, p < .001$)、正当反応率は本実験よりも予備実験で高かった。このことから、本実

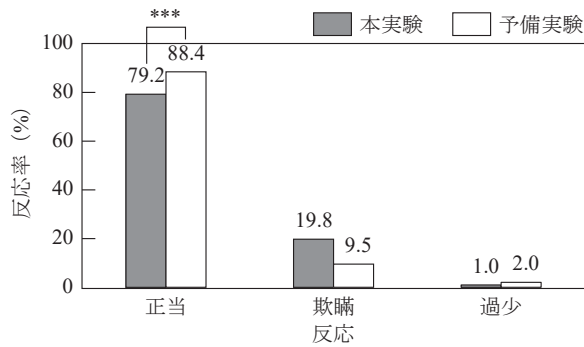


図2: 各条件の反応率

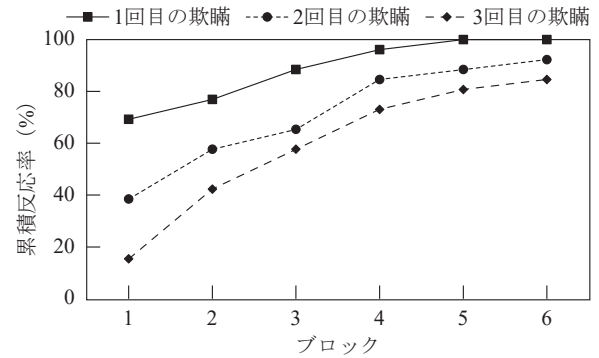
験では、過大な助言は単なる誤りだけではなく、明確な意図を伴う欺瞞も含まれると考えられる。ただし、過大な助言がすべて欺瞞であるとは言い切れない可能性があることは、考察において改めて検討する。

3. 結果

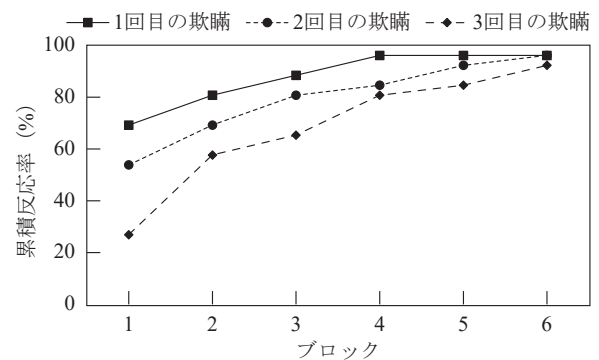
本研究では、参加者 26 名全員に正当反応と明確反応が出現していたが、曖昧反応については 1 名を除く 25 名に出現していた。1 名は曖昧反応が出現していなかったものの、明確反応が出現しており、全ての参加者において欺瞞に分類される反応が見られた。このため全ての参加者を分析対象とした。また、助言を行う際にボタン押しの不具合が全 3120 試行 (26 名 × 120 試行) のうち 66 試行 (2.1%) で生じたため、これらの試行を除いた 3054 試行を分析対象とした。その結果、本実験では正当反応が 79.2%、明確反応が 9.6%、曖昧反応が 10.2%、そして過少反応が 1.0% であった。それぞれ χ^2 検定を行ったところ、それぞれの反応率で有意な差がみられた ($\chi^2(3) = 4850.46, p < .001$)。

次に、明確反応と曖昧反応において、初発からの欺瞞推移がどのように異なるかを検討するため、明確反応と曖昧反応の 1 回目の欺瞞から 3 回目の欺瞞までの推移をまとめた (図 3)。1 ブロック目において、1 回目の曖昧反応を行った者が 69.2%、明確反応を行った者が 69.2%、2 回目の曖昧反応に至った者が 53.8%、明確反応に至った者が 38.5%、そして 3 回目の曖昧反応に至った者が 26.9%、明確反応に至った者が 15.4% 存在した。

さらに、明確反応もしくは曖昧反応に分類される欺瞞反応において、試行を重ねるとともに出現頻度が増加するかを検討するため、ブロックごとの平均出現回数を算出した。さらに、欺瞞反応が単なる誤反応である場合、過少反応も同様にブロックごとに変化していくと考えられるため、過少反応についても平均出現回数を算出した。ただし、明確反応、曖昧反応、過少反応は表 1 のように、各反応が出現し得る試行数が異なる。例えば、曖昧反応はドット 100 個を呈示したときに 150 個と回答した試行のみであるが、明確反応はドット 50 個のときに 100、150、300 個、100 個のときに 300 個、150 個のときに 300 個と回答した試行となる。つまり、明確反応は 1



(a) 明確反応



(b) 曖昧反応

図3: ブロックごとの反応推移

ブロックにおいて 15 試行 (3 種類のドット × 5 試行) の機会があるが、曖昧反応は 5 試行しかないということである。このため、各反応のブロックごとの平均出現回数を検討するのではなく、それぞれの反応が出現し得る試行回数を母数とする反応出現率を算出し、検討した (図 4)。その結果、曖昧反応について 1 ブロック目では平均反応出現率が 33.1% ($SD = 28.81$) であったが、6 ブロック目では平均 44.6% ($SD = 33.13$) となり、反応率の増加が確認された。また、明確反応について 1 ブロック目の平均反応出現率は 9.5% ($SD = 9.82$) であったが、ブロックを経るごとに増加し、6 ブロック目では平均 19.0% (SD

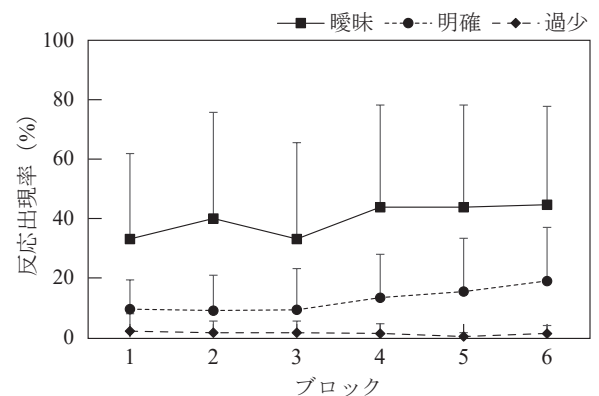


図4: 欺瞞の種類別のブロックごとの平均欺瞞回数
注: エラーバーは標準偏差。

= 18.06) となった。最後に過少反応の平均反応出現率は1ブロック目で2.1% ($SD = 5.90$) だったものが、6ブロック目では平均1.3% ($SD = 2.69$) となった。以上のことから、過少反応は反応出現率がきわめて低く、曖昧反応がどのブロックにおいても過少反応と明確反応よりも反応出現率が高かった。次に、反応ごとのブロック内の変化をみるため、それぞれの反応出現率の逆正弦変換値を求め、ブロックを独立変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、明確反応では、ブロックの主効果が有意であった ($F(1, 125) = 3.72, p < .01, \eta_p^2 = .13$)。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、6ブロック目(平均19.0%)の方が2ブロック目(平均9.0%)よりも有意に平均反応出現率が高い傾向にあった ($p = .10$)。しかし、曖昧反応と過少反応ではブロックの主効果は有意ではなかった(曖昧反応: $F(5, 125) = 1.42, ns, \eta_p^2 = .05$; 過少反応: $F(5, 125) = 0.79, ns, \eta_p^2 = .03$)。

続いて、図5に欺瞞反応が出現するまでに要した試行回数、つまり、欺瞞反応と次の欺瞞反応間の試行回数である欺瞞反応出現間隔をまとめた。参加者によって欺瞞を行った総数が異なるため、欺瞞の出現間隔の中央値を用いた。なお、半数の参加者が欺瞞を出現させた欺瞞の総数までを分析対象としたため、10回目までの欺瞞を検討した。課題開始後、曖昧反応では10.0試行、明確反応では12.0試行を経てから1回目の欺瞞が行われた。そして、11回目の欺瞞が行われる際には、欺瞞と欺瞞の間隔が曖昧反応では6.0試行、明確反応では2.0試行と最初の欺瞞と比較して短くなっていた。

4. 考察

本研究では、対人場面における欺瞞の繰り返しを誘発する課題を実施し、欺瞞を繰り返すことにより曖昧な欺瞞もしくは明確な欺瞞の出現頻度や出現間隔を検討した。その結果、曖昧反応は過少反応よりも反応出現率が全てのブロックを通して全体に高かった。しかし、ブロックごとの有意差は確認されなかった。一方で、明確反応では初めのブロックよりも後のブロックにおいて欺瞞の反

応出現率が高い傾向にあり、出現間隔も短くなっていた。

この結果から、繰り返しの欺瞞とともに欺瞞の出現間隔が短くなり、ブロックを経るごとに欺瞞が増加することを示すことができた (Garrett et al., 2016; Gino, Norton, & Ariely, 2010)。特に本研究では、後半のブロックで明確な欺瞞の出現率が高くなっており、この点はGino et al. (2010)と同様の結果であった。一方、本研究ではGarrett et al. (2016)では設定されていない、意図の曖昧な欺瞞として曖昧反応を設けていた。この曖昧反応は前半のブロックから反応出現率が高かったが、明確反応のようにブロックを経るごとに増加することはなかった。このことから、曖昧な欺瞞は全体として行い易いものの、繰り返し行うことにより欺瞞に対する慣れが生じ、徐々に明確な欺瞞も行い易くなったことが考えられる。以上のように、曖昧な欺瞞の重要性が示唆されたことから、Garrett et al. (2016)のような明確な欺瞞だけではなく、曖昧な欺瞞を測定することにより、明確な欺瞞に代表される深刻な欺瞞が引き起こされる背景メカニズムについてより詳細な検討が可能になるといえる。今後は、本稿で扱った課題のように明確な欺瞞と曖昧な欺瞞の相互作用を検討できる課題を使用し、曖昧な欺瞞の存在が明確な欺瞞の増加につながるのかどうかを検討する必要がある。

また、課題の初発から欺瞞が促進された要因として、ドット300個を呈示した際に、過大な助言ができないため正直にならざるをえない試行の存在、つまり正直な自己を維持可能であったことが挙げられる。これまでの研究から、このような正直な自己が維持できるか否かが欺瞞に影響を及ぼすという自己概念維持理論が提唱されている (Mazar et al., 2008)。この自己概念維持理論によると、私たちは自己が正直ではないと認識してしまうほどの大きな欺瞞を行うことができないとされている。逆に言えば、正直な自己を維持できる言い訳を担保できれば、欺瞞を行いやすくなるといえるのである。この点について実験的に検討したのがMazar & Zhong (2010)である。Mazar & Zhong (2010)は、環境に優しい商品の購入といっ

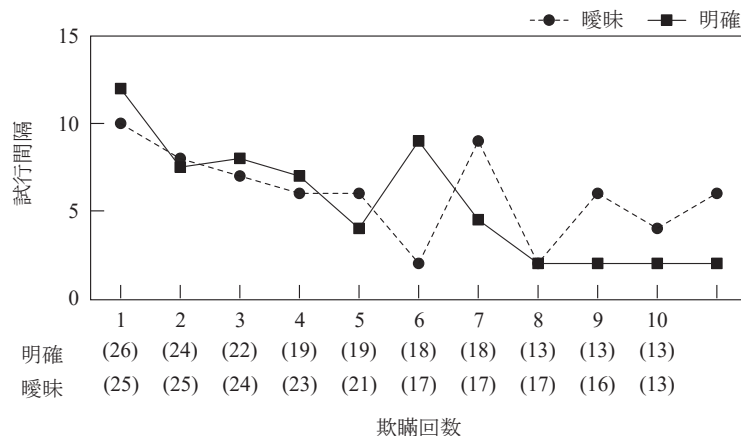


図5：欺瞞の種類別の欺瞞回数ごとの欺瞞間隔（中央値）

注：横軸下の（ ）内はそれぞれ明確と曖昧のデータ数を表している。

た具体的な道徳的行為を課題の前に行わせた場合、正直な自己が維持されやすく、より多くの欺瞞が見られることを明らかにした。すなわち、道徳的もしくは正直な反応を確保することによって、欺瞞が起りやすくなるといえる。本研究では、欺瞞が不可能な試行を用意したことにより、正直な自己を維持することが可能であった。これにより、かえって欺瞞の増大が顕著に現れた可能性がある。このため、本研究で使用したように自己概念を担保できる課題を参加者に実施することが欺瞞研究で望まれるといえよう。

最後に誤反応の問題について考察する。本研究では、助言者が意図の曖昧な欺瞞を行うことが可能となるように、曖昧な欺瞞を設定した。このため、今回、欺瞞反応として分類した行動の全てが欺瞞であったとは言いがたく、誤反応を含んでいた可能性がある。この点に関して、もしドット数を同定するという課題が難しく、誤反応が起こるならば、過少方向への反応と過大方向への反応は互いに同程度発生すると考えられる。しかし、明確反応や曖昧反応といった欺瞞反応と過少反応を比較したところ、過少反応は明確反応や曖昧反応よりも反応出現率が極端に低かった。このため、本研究の結果からは誤反応によって過大な方向に反応がなされたとは考えにくく、参加者の多くは自己利益のために過大な助言をする傾向にあったと言える。

さらに、本研究のように欺瞞の有無を曖昧にすることで、参加者に欺瞞を促す課題は他にもある (Gerlach et al., 2019; Mazar et al., 2008; Shalvi, Dana, Handgraaf, & De Dreu, 2011)。これらの課題では、参加者の報告が真実なのか欺瞞なのかは区別できないため、予期される反応率と実際の反応率の比較によって欺瞞が行われたかどうかを検討している。つまり、欺瞞か誤反応かどうかは弁別不可能であるものの、事前の予測値と実際の観測値とを比較し、相違があれば欺瞞が行われたと評価している。本研究においても、正確に回答することを求めた予備実験での正当反応率と本実験での正当反応率を比較し、本実験において予備実験よりも正当反応率が低下していることから、欺瞞による反応が含まれていると考えられる。

今後の課題として以下のことが挙げられる。本研究は、繰り返し欺瞞を行うことで、次々と欺瞞が行われることを示していた。しかし、自己概念維持理論の点から考えると、繰り返し欺瞞を行ったとしても、人々は肯定的な自己を維持可能な一定の欺瞞しか行わないため、段階的に欺瞞が増加せず、肯定的な自己を維持できる範囲内の欺瞞にとどまるはずである。このことは本研究の結果とは矛盾するものである。こうした矛盾については、繰り返しの欺瞞が単に欺瞞を増加させるだけではなく、繰り返しの欺瞞によって肯定的な自己のハードルが下がったことが考えられる。しかし、繰り返しの欺瞞によって肯定的な自己の維持がどのように変化していくのかなど、今後検討の必要がある。

以上のことから、本研究では、繰り返しの欺瞞の動態的变化を顕著に捉え、どのように欺瞞が増大していくの

かを明確に示すことができた。また、これまでの欺瞞研究とは異なり、明確な欺瞞だけではなく、曖昧な欺瞞も行えるようにしたことにより、多面的に欺瞞を検討することができた。その結果、本研究では曖昧な欺瞞が全体として行われやすく、また、この曖昧な欺瞞が可能であったことにより、明確な欺瞞の出現に影響を及ぼしたことが示唆された。しかし、将来的に繰り返しの欺瞞が個人の自己概念に与える影響といった、内的要因への影響も検討対象に含んだ発展的研究を実施していく必要があるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 15K04048 の助成を受けたものである。また、本研究を行うにあたり、長谷和久先生 (神戸学院大学) から貴重なご助言を頂戴したことを深く感謝いたします。

注

(1) 予備実験では、10名のうち9名の正当回数が総計241回(正当率92.2%)、誤答回数が総計21回(誤答率7.8%)であったにも関わらず、1名は正当が15回(正当率50%)、誤答が15回(誤答率50%)であった。両者の正当率を比較するため、直接確率計算を行った結果、その偶然確率は $p = 3.75 \times 10^{-8}$ であった。このため、この1名を外れ値とし、分析から除外した。

引用文献

- Abeler, J., Nosenzo, D., & Raymond, C. (2019). Preferences for truth-telling. *Econometrica*, 87, 1115-1153.
- Garrett, N., Lazzaro, S. C., Ariely, D., & Sharot, T. (2016). The brain adapts to dishonesty. *Nature Neuroscience*, 19, 1727-1732.
- Gerlach, P., Teodorescu, K., & Hertwig, R. (2019). The truth about lies: A meta-analysis on dishonest behavior. *Psychological Bulletin*, 145, 1-44.
- Gino, F. (2015). Understanding ordinary unethical behavior: Why people who value morality act immorally. *Current Opinion in Behavioral Sciences*, 3, 107-111.
- Gino, F., Norton, M. I., & Ariely, D. (2010). The counterfeit self: The deceptive costs of faking it. *Psychological Science*, 21, 712-720.
- Hochman, G., Glöckner, A., Fiedler, S., & Ayal, S. (2016). "I can see it in your eyes": Biased Processing and Increased Arousal in Dishonest Responses. *Journal of Behavioral Decision Making*, 29, 322-335.
- 菊地史倫・佐藤 拓・阿部恒之・仁平義明 (2008). 過失に対する赦しの評価に怒り感情・信憑性・重大性の評価が及ぼす影響. *感情心理学研究*, 15, 115-123.
- Mazar, N., Amir, O., & Ariely, D. (2008). The dishonesty of honest people: A theory of self-concept maintenance. *Journal of Marketing Research*, 45, 633-644.
- Mazar, N. & Zhong, C. B. (2010). Do green products make us

- better people? *Psychological Science*, 21, 494-498.
- Pittarello, A., Fratescu, M., & Mathôt, S. (2019). Visual saliency influences ethical blind spots and (dis) honesty. *Psychonomic Bulletin & Review*, 26, 1719-1728.
- Sezer, O., Gino, F., & Bazerman H. M. (2015). Ethical blind spots: Explaining unintentional unethical behavior. *Current Opinion in Psychology*, 6, 77-81.
- Shalvi, S., Dana, J., Handgraaf, M. J., & De Dreu, C. K. (2011). Justified ethicality: Observing desired counterfactuals modifies ethical perceptions and behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 115, 181-190.
- グレイ, A., 太幡直也・佐藤拓・菊地史倫 (訳) (2016). 嘘と欺瞞の心理学—対人関係から犯罪捜査まで 虚偽検出に関する真実—. 福村出版. (Vrij, A. (2008) *Detecting lies and deceit: Pitfalls and Opportunities*. 2nd ed., Wiley.)
- Welsh, D. T., Ordóñez, L. D., Snyder, D. G., & Christian, M. S. (2015). The slippery slope: How small ethical transgressions pave the way for larger future transgressions. *Journal of Applied Psychology*, 100, 114-127.

(受稿：2020年7月13日 受理：2020年8月7日)